

『新宿の夜』

佐倉 尚紀

「そうそう、そんなこともあったな」

栄治は思い出すような目をして秦の話にうなずいた。

ここは新宿西口にある和風居酒屋。午後七時すぎの時間帯は帰りがけのサラリーマンでかなり盛況だった。

ふたりは、お互いにビールをつぎあいながら話しに夢中になっていた。

西條泰（さいじょうしん）はある中堅機械メーカー本社の総務部長として、人事も担当していた。バブル華やかかりし頃の求人難を体験してきた口である。

あの当時は、一流企業はともかく、その他多勢の企業は、企業を選んでやるという素振りの学生に翻弄されたものだった。地方の中小企業の中には、我が社に入社したら通勤用に車を提供します。という求人広

告まで飛び出した。

「いやはや、まったくひどい時代だった。

大学の就職担当教授なんか気の毒そうな顔をしてね、紹介したくても学生のほうが先に企業からアプローチをかけられまして、私どもの出る幕は無いんですよ、って頭をかいていたよ」

「うちらはそういう意味では、楽な時代だったかな。いや、今とは逆の辛いこともあったことはあったんだけどね」

佐々木栄治は、現在ハローワークの所長だが、バブル期は、職業紹介業務を担当していたこともあった。

「当時、採用担当者が顔を会わせるとしよっぱなの言葉が、お宅は何人集まりました？って」

「就職ガイダンスが盛況で参加企業数も随分多かったな。今とは全く違うね」

「大手企業は、青田刈りで、内定者はホテルで軟禁状態なんだよ。よそに行かせないようにあの手この手を使ってたんだ」

「学生は、複数社から内定をもらってたからね」

「中にはね、会社説明会で北海道から九州まで行ってきたって、そう話してた学生もいたよ」

「会社訪問すると、大体の企業は旅費を出していたからな」

「そういう企業を狙って旅行のつもりで訪問した豪の者も随分いたらしいよ」

「あらかじめ、交通費は支給するのかって聞いてくる学生がいたからね」

「変われば変わるもんだ」

「今、職安には若い連中も随分たくさん来ているよ。新規学卒でもなかなか思った就職先が無くってねえ。就職浪人がねえ……なんとかしたいとは思っているんだが……それにここ数年、企業のリストラが増えて、中高年離職者の問題がね……まったく頭が痛いよ」

「うちの会社も数年前に首切りをやって……人事担当の最も辛い場面だね、あ

れは。採用活動で苦勞してるほうがましだな」

「多かれ少なかれ、今はどこの企業も同じような悩みを抱えているねえ」

そう言いながら、栄治は秦にビールをついだ。

.....

その日は思いがけない出逢いだった。

会合は午後二時から始まった。

有効求人倍率が五十%台という、ふたり
に一人しか就職出来ない不況期を反映して、
雇用促進協議会が開催された。いわば秦た
ちの企業側に対する雇用促進のための情報
交換会である。その席に、この春の異動で
所轄の所長として初めて顔を見せたのが
佐々木栄治であった。

それぞれのテーブルにはネームプレート
が置かれている。「佐々木栄治」の文字を何
の気なしに眺めていた秦は、そう云えば居

たなこんな名前のやつがと、ぼんやり見つめていた。

手元の資料にも西新宿公共職業安定所長
佐々木栄治と記載されていた。

(佐々木、佐々木栄治か)記憶をたどった。

簡単な自己紹介のあと、最近の雇用情勢
について所長が説明。

(あの佐々木栄治か?) 秦は所長の説明を
聞きながら考えていた。

その後、統括官が具体的な雇用状況を報
告した。企業側は、今後の採用状況を説明
し、意見交換に入った。どの企業も新規採
用には慎重だった。

協議は二時間程で終わった。

お開きになった時、秦は所長に歩み寄っ
た。

「佐々木所長さん、大東機械工業の西條で
す」

名刺を交換しながら、

「所長さんは、ご出身はもしかして、新潟
では?」

「ええ、そうですが」

「私も新潟なんです」

「西條さん、西條秦さん。ああつ! 秦さ
ん? あの秦さんですか?」

「そうです。やはり栄治さんか! 同姓同
名の人っているもんだなあつて、何気なく
思っていたんですが、話を聞いているうち
に、もしかするとつて・・・」

「いやー、奇遇ですなあ。中学卒業以来に
なるかなあ」

「三十・いや四十年ぶりぐらいか、面影
は残っているもんですね」

「ほんとに、そうですね。お元気そうで」
お互い白髪混じりの髪を見つめながら、

偶然の再会を懐かしんだ。

「今日はお忙しいところ恐縮でした」

栄治は所長としてのねぎらい言葉で言っ
た。

「どうです、ここで会ったがなんとやらで、

今晚、時間取れませんか?」

と秦は誘った。最近の公務員は綱紀粛正

で、民間人との飲食は極力遠ざけられていくことは知っていたが、ふたりの場合は違うだろうと、

「まあ、ふたりだけの同級会ですから」

秦は重ねて言った。

「いいでしょう、やりましょう」

「何時くらいに待ち合わせしましょうか？」

「私のほうは一旦、所に戻って残務整理をしてから出ますから・・・七時に西口あたりでどうですか？」

「それじゃあ、そうですね、西口を出て右手のところに、和楽という店があるんですが、ご存知ですかね、和風居酒屋の和楽」

「ああ、和楽ですね。わかります、わかります」

「そこで食事でもとりましょう」

「じゃあ、七時ということだ」

.....

その店は、和食専門で柱や壁、テーブル

など田舎作りの感じのよい雰囲気醸し出されていた。テーブルの下は掘りごたつ形式なもの、田舎の風情が感じられた。隣の席とは杉板を焼いて作った格子戸状の衝立で仕切られている。

「それじゃあ、再会を祝して。乾杯」

「驚いたよ、まさかこんな風に逢うとはねえ」

「まったく、人事屋と職安とはね」

「でも不思議なもんですね、何十年も会っていないのに分かるもんだよね」

「名刺出されたとき、名前を見てなんかピーンとくるものがあつたんですよ」

「あなたが高校を出て上京してたつてことは知っていたけど・・・」

「私もそうなんだ」

「大学へ入ったものの、当時、学生運動が盛んでしたからね」

「お茶ノ水あたりでよくヘルメットをかぶったやつが、喧嘩してましたね」

「あのころ、特別、政治的思想を持つてな

い学生まで、ワッショイワッショイってやってたもんな」

「私は、そういうのに無頓着でね」

「私もほかのことに夢中で」

「無関心で良かったのか悪かったのか。彼らはあれで青春のエネルギーを発散させていたんだろうけど」

「ああいう時代もあつたんだなあ」

「若い若いと思っているうち、お互いいつの間にかもうそろっとの歳になったじゃないか」

「あつという間だなあ」

ビールをつぎあいながら、お互いたどつた路を語り合つた。高校からはふたりは別々の秦路をたどつていた。そして、栄治も秦も大学を卒業するとすぐに、それぞれ今の職についたのだ。

話は仕事のはなしから次第に田舎時代に移つた。自然と声も若返つてきた。

「悪ガキだった我々が共に人々に関係する仕事をやろうとはなあ」

栄治がつぶやいた。

「そうだよねえ」

悪ガキのほうで後で他人の気持ちが分かるものだって、誰かが言ってたような気がしたが口には出さなかった。

家もそう遠くではなかったし、幼稚園から中学までずっと一緒だった二人。西條と佐々木で名簿順も並んでいた。四十年近くの昔の時代に戻るのとは簡単なことだった。

長いはずの時間が急に圧縮されたせいとか、話はあちこちに飛んだ。最初のうちこそ、他人行儀な言葉遣いだったが、徐々にチャンポンになり、それが自然と昔の言葉づかいに戻っていった。思い出話に花が咲き、あつという間に二時間近い時が過ぎた。

「おい、腹ごなしにカラオケでもやって帰ろうや」

秦の音頭で、ふたりともほろ酔い気分店で出た。

.....

秦が、知っている店があるからと、心地よい風に吹かれながら路地を行った。

七月梅雨明け宣言は出てはいないが、かなり夏らしい気候に移っている。

ネオンのビルかビルのネオンか、きらびやかな彩りを頭上に見ながら、「スナック京子」のプレートのついたこげ茶色の分厚いドアを開けた。

「いらっしやいませ」

元気な声が出た。

そこはカウンターとボックスで十四、五人も入れれば一杯一杯の小きなスナック。

先客は三人連れの中年男性だけだった。

一人が、演歌を唄っていた。

「あら、秦さんお久しぶり。今日はご機嫌ですわね」

この店では、西條は「しんさん」で通っていた。

「ああ、今日は実に嬉しいことがあってさ」「はい、おしぼりどうぞ・・・で、なによ

嬉しいことって」

「こちらと四十年ぶりのなつかしのご対面」

「まあ、すてき。初めまして、京子です。紹介してくださる？お連れ様」

「佐々木と言ってるね、幼稚園からの幼なじみ」

「佐々木さんっておっしゃるの？ どうぞ、ごひいきに」

「よろしく」

「会合で偶然めぐりあったのよ。だから今日はふたりだけの同級会さ」

「それはいいわねえ。おビール、それとも水割り？」

「とりあえず、ビールを」

「幼なじみってことは、おふたりとも新潟ね」

「そうそう」

「佐々木さんは、もうずっとこちら？」

「そう、それでも年に一回は帰ってるかな」「そうか、栄治は毎年帰ってるのか」

「両親はいないんだけど、兄貴が家を継いでいるからね」

「はい、おビール。私も一杯だけいただきたいいい？」

「よしじゃあ、あらためて乾杯といこう」

「よろしく、かんぱーい！」

「秦は長男のくせに、こっちに住み着いちゃったんだ」

「帰っても良かったんだけど、まあいいかって。親も好きなようにやれって言ってくれたから」

「おれは次男坊だったからさ、もともとどこへでも行けて感じだったな」

「秦さんは、たまには郷里へお帰りになってるの？」

「それがトンとご無沙汰。両親ももういないし。そういえば法事で三年ほど前一回帰ったきりかな」

「ふるさとは遠きにおいて・・・か」と栄治。

「覚えているかい故郷の村を・・・ふたりで遊んだあの山小川・・・」

「チャンチャチャン」

秦がおしぼりを丸めてマイク代りに唄ったら、栄治が割り箸で拍子を取った。

「目に浮かぶねえ」

「我十八、青雲の志を抱いて田舎を飛び出し、か」

「今じゃこの歌の文句みたいだな、・・・故郷を出るとき持ってきた大きな夢を杯に・・・」

「チャンちゃちゃちゃ、チャンチャチャンと」

今度は栄治が唄い秦が割り箸で小皿を叩きながら、合いの手をいれた。

「あらあら、まあまあ、いい調子。三橋美智也と思ったら三波春夫まで」

「ママも古いね」

「おあいにくさま。これも職業能力！」

「今宵ひと時、気分は中学生いや小学生だな。でもシンデレラみたいなもんだ。十二

時の鐘がなると、ふたりは大人の世界に戻るのであります」

「さつき、飯を食いながらね、ずーっと田

舎の話ばかりよ」

「いいわねえ。なつかしい思い出がたくさんあるんでしょ？」

「そうだよママ、・・・雪の新潟吹雪にくれてよ、の文句そっくりの状況を体験していたんだからね」

「あの頃、冬の夜は、路面が黒光りするほど凍ったよなあ」

「長靴にスケートつけて滑ったこともあった」

「マイカーもほとんど無かったからね。ましてや融雪パイプなんか無いわけだから。凍った道路では馬そりが運搬手段だったも

んなあ」

「馬そりか・・・」

「覚えているか？ 朝、学校へ行くときのこと」

「ああ・・・」

ふたりの脳裏には同じ映像が蘇った。

・・・

「シー！」

「ほら、そつと乗れや」

「ちよつとカバン持つてて」

「先にカバンを載せろ」

秦と栄治は馬車引きのおじさんに気づかれぬよう、そつと荷台にカバンを載せそして腰かけた。馬そりは多少左右に横滑りしながらも、すいすいと秦んでいく。おじさんは、何かな？ と気配を感じて後ろを振り向くが、荷物もあつて、ふたりには気がつかない。

「ホーレ、つあつあー乗ったーれ、ぼつこれ車に乗ったーれ（*ほらおやじさんだれかが乗ったよ。こわれたくるまに乗ったよの意味）」

秦と栄治がこつそり乗っているのを見た他の悪童連がはやしたてた。

すると、馬そりが止まり、

「こら！ なにしてんだ！ 降りろ、降りろ！」

おじさんが歩みより怒鳴るが早いか、あわててカバンを手に飛び降り、馬そりから離れるのだった。

「だまつてろや、おめえつてにも、ちゃんと乗せるから」

と他の子たちをどやす秦。

そして様子見しながら、悪童連に目で合図。乗った瞬間、

「ほーれつあつあー乗ったーれ」

こんどは栄治がはやしたてた。

「このやろー、こりねーでまた乗ってんのか！」

馬に使うムチ棒を振り上げ怒鳴った。

馬もしつぽを振り上げ、ばちやばちやとふんを落としたり。

「うわー、きたねえーきたねえー」

あわててみんな道の端のほうまで逃げまわった。怒られては降りそしてまたそつと乗りを繰り返しているうちに、学校の近くになつてしまうのだった。

「凍った雪道は歩きにくくて、馬そりは快適な乗り心地だったよな」

「どこまで気づかれないで乗っていることが出来るか、それとさあ、馬ふんをかけられないよう馬にも注意しながら、馬車引きのおじさんとの駆け引きがさ、子供心にもおもしろかったなあ」。

「最近温暖化のせいかな、路面も凍ることがほとんど無くなったみたいよ」

「さあーどうぞ」と言つてママがさしだす。グイッと飲み干したコップにビールをついでもらいながら栄治は、「そうそうこんなこともあつたよ」と話し始めた。

「あの桐材置き場の一件だけど」

「桐材置き場？ あー、あー、あれか」

.....

「井」の字のようにして互い違いに高く積み上げられた桐材は、かくれるのにちようどよかった。「井」の字はこの広場にはた

くさんあった。ここはダンス・建具などの産地で、材料となる桐の板材を天日で乾燥させるため「井」の字に高く積み上げていた。「井」の字の真ん中は、人が一人やふたりは十分に入れるスペースがあり、ちょうどジャングルジムのような、子供が遊ぶにはもってこいの大道具であった。

そのスペースへは、脇に立つ桜の木の枝からもぐりこめた。広い敷地をとり巻くように、かなり幹が太くなった桜の木が立ち並んでいた。

秦たち小学生十人ほどが二つのグループに別れ、チャンバラごっこをしていたときのことである。桜の木の下にいと、雨がふってきた。と思ったら、上にいた栄治がオシッコを振りまいていたのだ。下には運悪く栄治を追いかけようと駆け寄ってきた三人がいた。その中のひとりが秦だった。他のふたりはあわてて近くの井戸場へ駆けていった。

「へへー、どうだ、まいったか！」

栄治の勝ちほこった声が出た。

「ヨーン、やったな！」

顔を手で拭きながら足で桜の木を蹴った。

「そんげことしたって、むだだよー」

栄治は叫びながら枝から桐材の中に消えた。

「あんちくしょう、見てろ」

桜の木の下には栄治の運動靴があった。

秦はズボンを下げお尻を出してしゃがんだ。

真つ赤な顔してりきんだら、ウンチがでた。まさか自分でも出るとは思わなかったのだが、ウンチは栄治の片方の靴の中にすっぽりとおさまった。秦はその上に桜の葉っぱを二枚かぶせた。

栄治はまだ桐材のどこかに隠れているらしく、姿は見えない。

「オーイ、栄治、どこにいるんだ！」

「知るか！」

だまっていればいいものを、栄治の声が出た。

いくつもならんだ桐材の隙間から人の気

配が出た。

「めつけたぞ、栄治」

そう言うなり、秦は桐材を思いつきり押した。積み木崩しのようなもので、「ガラガラ・ドタドタ」崩れた桐材の中から、飛び出した栄治は先ほどの枝を伝って桜の木をよじ登った。

「おい栄治、もういいや、おりてこいや」

「もう乾いたか？」

「まあいいから、おりてこいって」

オシッコのことはいいのか？ と秦の様子をうかがいながら、栄治はゆっくりと枝をつたって降りてきた。そして一メートルくらいのところから靴の上にポーンと飛び降りた。

「ううん？」

「ううん？」

「なんだこりや！」と泣き出しそうな顔をした

「あつはははっ」

秦は栄治の足もとを指さし、手をたたいて大声を出して笑った。

他の連中も一緒になつて笑い転げた。

あとで崩した桐材のことで怒られたことは言うまでもない。

「ふたりとも、なかなかやるのねえ」

ママがあきれたような顔で、二人の顔を見くらべながら言った。

あの桐材置き場も、今では住宅がいくつか建っているという。

「ねえ、秦さん、カラオケでもどう？」

ママがうながした。

「今日はヒマそうだな」

いつの間にか、客は自分らふたりだけになつていた。

「今日も、よ。いいわねえ、幼なじみって」

「ママの田舎は仙台だったな」

「そう私は、仙台」

「よし、じゃあ、青葉城恋唄といこうか」

「はいよ、すぐ出ますからね」

秦は気持ちよさそうにマイクを握りしめた。

「佐々木さんは？ リクエスト」

「そうだね、裕次郎でいくかな。赤いハンカチで」

「赤いハンカチね・・・はい、予約

OKよ」

「ママさん、こじんまりとしてて、なかなかいい店じゃないか」

「ありがとうございます。これでお客さんがもつと来てくれたらね。あつごめんさない、ビールおつきしなくて」

「いやいいんだ、ビールはすぐに腹がいっぱいになつてね」

「水割りにします？」

「焼酎あるかな、あつたらお湯割で、ちょっとうすめに割ってくれる？」

「ハイ、ただいまご用意いたします」

「でもまだ十時だから、これからまだまだじゃないの」

「大体いつも遅いのよね、この辺のお客さまは」

「栄治、貸切りみたいでいいだろう？」

唄い終わった秦が口をはさんだ。

「まあ、じっくりと話も出来るしな」

「佐々木さん、赤いハンカチ、スタンバイ！」

「よっしゃあ」

「ギャルが来ないところがいいんだ、この店は。やつぱり年代が違つてどうも居心地が悪くつて」

「あら、私だつてまだギャルのうちよ」

「ギャル？ 大ギャルか！ まあいいさ。それぞれ年代の味つてもんがあるんだから」

「いいこと言つてくれるわねえ」

「ママひとりで大変だな」

「以前は若い娘もいたんですけど、長続きしないのよね。最近の娘は」

「ママ、あいつはね、時代劇で言う口利き屋だよ」

栄治を指差して秦が言った。

「そうなの、いい娘がいたら連れてきてもらおうかしら」

「それより、連れてくるのはお客さんのほうがいいんじゃないのかい」

「オホホホ、それもそうね」

「これからは、老人社会だから、老人たちがたむろできる店があってもいいんじゃないのかな？」

「年金もらいながらスナックでカラオケ？」

「その代わり、料金は良心的にと。いいぜ、ワンサカお客さんが増えるよ。ご老人が。」

「そうすりやママはホンとのギャルだ。彼らから見ればね」

「そうねえ、百歳現役ママをねらおうかな」

「じゃあ、俺は百十歳の老人だ」

席に戻った栄治がこれを聞いて

「そうそう、老人と言えば・・・」と思い出したように言った。

「五円玉の件もあったな」

「五円玉？」

「ほら、ビニールのひも付けてさ」

「あああ、あのことか」

「なあに、五円玉って、ねえ教えて、教えて」

・・・

道幅二メートルくらいの細い小路があった。

その小路をまっすぐ十メートルくらい秦むと大通りに出る。秦と栄治は、細い透

明のビニール線を五円玉の穴に結びつけた。

「五円玉は大通りの人が歩くあたりに置いとけや」

栄治はチョコチョコと走って、秦の言うとおりの道の端の方に、目につきやすいように置いてきた。

「いいか、見てれよ」

秦と栄治は小路の垣根に身を隠すようにしながら、大通りに目を向けている。

しばらくすると

「オコココ、オコココ」と言いながら、半

分腰の曲がったおばあさんが、五円玉を拾おうとして、さらに腰を曲げてこっちに向

かってきた。おばあさんが五円玉を拾おうと手を伸ばし触れようとした瞬間、秦がビ

ニール線を少したぐりよせる。自分が動かしてしまったと勘違いして、さらにおばあ

さんは、移動した五円玉に手を伸ばす。三回ほどで、秦たちのいたずらだと知って、

「こら！ おめえたち、ばばをからかう気か！」

大声を出して怒った。ふたりは五円玉をひきずりながら小路を逃げた。しばらく走

って振り向くと、おばあさんの、曲がった腰を少し起こして大通りに戻っていく姿が見えた。

「わっははは！ わっははは！」

ふたりは腹を抱えて笑った。

ここは、野菜などをいっぱい入れた馬籠を背負って行き来する人が多く、どうしても視線が下を向いてしまうのだ。

「もう一回」

と何度も同じことを繰り返した。

「悪いことするのねえ、秦さんは。老人虐待じゃない。今なら大変よ」

「ママはそういうけどさ、あのころの年寄りには元気だったぜ。曲がった腰をしながら重たい荷物背負ってさ。どこまでも歩いていくんだから、なあ栄治」

「確かに今の人以上に足は達者だったかも」

「そりゃあ、そうでしょうけど・・・」

「車も無かったし、粗食に耐えて、それがかえって健康に良かったんじゃないのかな」

「そう、たいがい家で野菜を作っていたし、にわとりを飼っててさ、タマゴなんか自給自足だしね。とにかく新鮮なものを食べたんだから」

栄治は昔の風景を見ているような表情を見せた。

「タマゴなあ・・・」

秦には栄治の口にしたタマゴで思いあたることがあった。

「タマゴって言えば、あひるのタマゴ事件を思い出したよ」

・・・

中学一年のときだった。

朝会で、教頭先生・通称「エー先生」が話し始めた。話の中で「エー」という言葉がクセで、生徒は教頭とは呼ばないで、エー先生と呼んでいた。人のよさそうな顔つきで生徒からも親しまれていた。だから「良い先生」に引っかけたあだ名でもあった。「生徒は教頭の話よりも、エーを何回言うかを数えるのに集中していたよな」

「そうだったねえ」

「エーみなさんに注意をいたします。エー学校の近くの川であひるを飼っているお家があるのは、エー皆さんも知っていますね。」

エー実はきのう、エーその飼い主の方から、エー苦情がよせられました。それは、エーうちの学校の生徒が、エーあひるをいじめたと言われるのですが・・・」

秦はエーの数を数えるのをやめ、

「おい、栄治、おめえだろ？」

小さな声で聞いた。

「あそこのじいさん、見てたのかな」

「見張り番くらいしかやることなさそうだからな」

「見てたら、すぐどなって出てくるんじゃないのか」

「いっつもでっけえー声だしてたもんな」

「でも、そんな時はそんな声、聞えなかったけどなあ」

「いや絶対、栄治の顔見られてるって」

「やべえなあー」

「で、どんなふうにいじめたんだ？」

また小さな声で秦は聞いた。

「あんな、おれ、あひるにタマゴうませよ」と・・・」

「タマゴ？」

「うん」

「栄治がうませることなんか、できねえだろう？ だいいち、どれがメスかおめえわかんのか？」

「そんな余裕ねえから、腹のあたりが太っているやつをねらったんだ」

「それじゃ、だめさあ。」

「おれなあ、あひるの胸から腹にかけて両手で絞ったんだよ。押し出せばタマゴがけつから出てくるんじゃないかと思ってさ」

「で、どうだった？」

「ダメダメ、あひるのやつ、足バタバタぎやあぎやあ叫びやがって。それであわてて逃げてきたんだ」

「それじゃ、おめえ、絶対見つかったぞ」

「そうかもな、弱ったなあ」

朝会の中では、もちろん誰がとまでは教頭先生も言わなかったが、「動物をいじめてはいけません」というような言葉でしめくくっていたような気がする。

「それで、その後どうなったの？」

ママが興味深そうに尋ねた。

「たいへん、たいへん」

栄治はそう言って首をすくめた。

「あのときやはり誰っていうこと教頭は知ってたんだよな」

秦がつけ加えた。

「そうなんだ、教務室に呼ばれてさ、教頭と担任のギョロに怒られたのなんの」

ギョロというのは、ギョロつと睨み付けるような、でかい目をした先生のあだ名だった。

「ぶん殴られるかと思ったよ。そのあと両親が学校へ呼びつけられて。家でまた怒られてさ。もう参った参った」

「おふたりとも、悪童だったのねえ。今のお仕事からとても考えられないわね。昼間はまじめな顔して・・・ちゃんとお仕事やってるんでしょねえ？」

「そりゃ、そうさ。もう昔の話、四十年も

ね。これだけ経てば時効だよ」

秦と栄治は口を揃えて言った。

「俺たちの頃の悪は、現代の悪と質が違うよな」

「そうかしら、聞いてると危ないことやってるじゃない」

「まあ、同じ悪でも無邪気なもんさ」

「まだまだあるんじゃない？ 旧悪が」

「あっはははー、たたけばなんとやらで・・・」

「こんどは、ママの旧悪とやらも聞かせてもらおうか」

「わたしやございません！」

「おおつ、いいこぶって」

「あーあ、あの頃に戻ってみたいもんだ。

なあ栄治」

「そうだねえ、定年になったら二人で戻るか」

「そうしたら、うちの店に来れないじゃない？」

「その時はママも来ればいいや、我々とい

緒に」

「そうねえ、秦さんたちについて行こうかしら。まあ、明日考えてみるわ」

「明日？ いけねえ、おい、シンデレラだ、シンデレラ」

「おっとつと、オオツ、もうこんな時間か、お時間がよろしいようで。馬車がなくなるといけないからな」

「そうだね、いやあ、今日は楽しかった。

栄治また今度あおうや」

「OK、そうしよう」

「そのときはまたうちいらしてくださいね。きつとですよ」

「ママおあいそ」

「秦、今日の分は割り勘だぞ」

「オオー、分かってる分かってる」

「はい、ありがとうございます・・・秦さん、佐々木さん気をつけてお帰りくださいな。またよろしくお願いします」

.....

「いやあ、今晚は久しぶりにいい気分を味わせてもらったよ」

栄治は秦との出逢いを噛みしめていた

「たまには、童心に帰るのもいいもんだ」

「ああ、いいもんだね。こういう飲み会は・・・仕事で飲むのはしんどいよ」

「そうだよなあ」

「目がさめりや、夢の世界から現実の世界へか。待つてるよ現実の世界がさ、目の前にぶらさがってるよ」

「このご時世、民間も切ないけど、お役人も大変だよな」

「まったく・・・立場は違うがお互い最前線で戦ってるようなもんさ」

「まだしばらく続け・・・」

童心は、いつときのオアシスか。歩く二人の背中がそう語っていた。

「栄治は小田急だったな、俺は西武新宿線だから、じゃあこの辺で・・・」

「うん、じゃあここで別れよう。いずれま

た・・・」

別れはまた逢う日の始め・・・

再会シリーズ 第7話 終わり